神様たちと麻雀打ったらISの世界に転生ってどうよ……?

嶺上開花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様たちと麻雀打ったらＩＳの世界に転生ってどうよ……？

【Ｎコード】

Ｎ８２１５Ｚ

【作者名】

嶺上開花

【あらすじ】

海で友人と戯れてたら足がつって死んだおれは、人数あわせと言う名目で宗教も国も違う神々の麻雀に付き合わされる。そこでなぜか転生の話になった結果、おれはＩＳの世界にＦａｔｅ／ｚｅ○ｏのバーサーカーことランスロットさんの能力『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』を有して転生した。はぁ、めんどうだ……。死にたくなってくる。

まさか、アマテラスがＨＫだったなんて……（前書き）

完璧に作者の趣味全開なＩＳの二次創作。
いくじぇ！？

まさか、アマテラスがＨＫだったなんて……

い、いま目の前で起こっていることを話すぜ……。

いいか、心して聞けよ？

おれは今、倫理の教科書や、聖書などなどに名を連ねる神々と麻雀を打っている。

「ポン」

おれがすてた「中」をポンした北風にいる神――北欧神話内に登場する、戦争と死の神、オーディン。その無精ひげ、鬱陶しくないですか？

「どうしたの人間。あなたの番よ？」

おれの正面――西風に位置するは、日本の神話の最高神であるアマテラス・オオミカミ。ちなみに滅茶苦茶美人だ。

本来ならばここで美辞麗句の限りつくしてその美しさを表現すべきなのだろうが、今のおれにそんな余裕は無い。

詰んである牌を取る手が震える。こりゃあ、チョンボ（麻雀でいうところのお手つき）しかねないな……。

「ふっ……カン！　ツモ！　嶺上開花（リンシャンカイホー）、ツモ、タンヤオ、イペーコー！　４，０００オール！」

「くっ……また嶺上開花（リンシャンカイホー）だと？　いかれている」

歯噛みしながら忌々しそうにおれをねめつけ、これまた嫌々点数棒をおれに渡すは、ヒンデゥー教の創造神ブラフマーだ。せいせい！　そんな物騒な目でおれを見るな！　おっかない！

「これで三連続リンシャン……化け物ね」

「貴様、まさか詰んでるのではないだろうな？」

自動卓でどうやって詰むんだよ……ブラフマーさん。

えー、取り合えず、ことのいきさつを簡単に説明しておこう。

さっそくですけど、おれ、死にました。

友人達と海に行ってサーフィンしてたら足つって、そのまま海に沈みました。あの息の詰まる感覚はもう二度と味わいたくないです、はい……。

それで冥府にいくらしかったおれを、宗教も国も違うこの神々は、麻雀の人数あわせという理由で、一時的にこの部屋にとどまらせている。

（まぁ、別に、麻雀嫌いじゃないからいいんだけど……。というか、なぜに麻雀？）

このメンツの中で一人だけ人間と言うのは、針のむしろに座らされている気分だ。死にたくなってくる。

「面白いこと言うのね。あなた、もう死んでるじゃない」

「ははは っ、そうでした。……って、アマテラスさん、ちょっちいいですか？」

「ん？　何かしら？」

「あなた、今、おれの心読みましたね？　読みましたよね？」

大事な事だから二回言ってみた。

アマテラスは露骨にしまった、と言う顔をして固まる。

「まさか、あんたら三人とも、おれのアガリ牌わかって打ってたな……」

他の二人にも視線を向ける。

「ひゅ～、ひゅるる～♪」

「……（プイッ」

二人ともそ知らぬ顔。なんて神様だ。

人間風情にこの神々は、読心術使っていやがった。

サイテーだ、こいつら。

神様なのに読心術使っていやがった。

大事な事なので（ｒｙ

「これでラス半（ラスト半チャンの略）でお願いします。おれ、もう疲れました」

「もう、そんなにすねないでよ、人間」

「別にすねてませんよ。ただ、神様ってこんなにペテン師だったんだと落胆はしてますけど。こっちは正々堂々打ってるのに……」

おれがそう言うと、おれの両サイドを固める二人の眉がピクリとはねあがる。

「大きく出たな、人間。我をペテンあつかいするとは」

「その発言、万死に値するぞ」

この二人、異様に沸点低い神様だなぁ……。

神様ともなるとプライドも高そうだから仕方が無いのか。

「このラス半で人間、貴様が勝てれば、このオーディンの名において、貴様を蘇らせてやろう」

「ほう……いいんですか、オーディンさん。あなた、これまでの局全て、おれに勝ったことありませんよ」

「これで勝つ。ただし、貴様が負けたときは、死よりも恐ろしいバツゲームが待ってると心得よ」

「わかりました」

死よりも恐ろしいバツゲームってなんだろうな……？

――１０分後――

「ロン。タンヤオ、１０００点」

アマテラスのロンで半チャンが終了。

結果、

おれ・３５，０００点

アマテラス・２７，０００点

オーディン・２０，０００点

ブラフマー・１８，０００点

「……くぅ、人間風情にこのざまとは、なんたる不覚！」

「あなたたち、馬鹿みたく危険牌捨てすぎ」

「アマテラスよ、貴様、いま馬鹿と言ったか。この俺に！」

まぁ、確かにセンスが感じられない打牌ではあった。

おっと、ヤバイやばい。考えてることは全て筒抜けだった。

「それよりもほら、そこの人間を転生させてあげるんでしょ、オーディン。ここに来て嘘までついたら、あなたの神意が落ちるわよ？」

「わかっている！」

そう言って椅子から立ち上がりおれのことを見下ろすオーディン。いや、だから怖いって。

「おい、人間喜べ。貴様を転生させてやる」

「はぁ、どうも……」

「むっ、どうした人間。嬉しそうではないな」

「転生、なんて言われてもピンとこないだけです」

「人間は順応性が低いな。俺は数秒でどんな場所にもなじめると言うのに」

そりゃあ、あんたが神様だからだろ……。

「それで人間、どこかリクエストはあるか？」

「は？　もといた世界に戻してくれるんじゃないのか？」

「貴様の体は既に灰となっている。無理だ」

「いや、そこは神様の力でどうにか……」

「無理なものは無理だ。考えても見ろ。灰燼と帰した人間が変わらぬ姿で現れれば、バランスが崩れるだろうが」

ああ、なるほど。確かに。

欝だ……。

「どこでもいいですよ。魑魅魍魎のいる異世界じゃなければ、どこでも」

「……ッチ」

舌打ちしやがった、この神様……。

送る気だったな、魑魅魍魎の居る世界に。

おれが半眼でオーディンを見ていると、アマテラスがパラパラめくっていた本をこちらに出す。

「なら、こことかどう？　『ＩＳ（インフィニット・ストラトス）』の世界なんか」

「おお、それはいい。幸いにも人間は男。世間の底辺に埋もれて死ぬように細工しよう」

「ちょっと待て！　その世界だけはやめろッ！　転生するにしてもその世界だけは絶対にいやだ！」

「どうして？　上手くことが運べば夜の魔王として、このＩＳ学園に入れるかもしれないのよ？」

「それはうまく運べばの話だろ！　運ばなければ女尊男卑の世界で虐げられる生活をするんだぞ！？　というか、夜の魔王ってなんだよ！」

「虐げるは少し言いすぎな気がするけど。ああ、そうだオーディン。あなたの権限で、この人間にチートを施してあげたらどう？」

「チート？　なんだ、それは」

「異常能力のことよ。そうねぇ、この場合の例とすれば、男なのにＩＳに乗れるとか」

と言うか、アマテラスさん、なんでＩＳとかチートとか知ってるんだよ。

「それはね人間、私がアマの岩戸の中に引きこもってるときに、暇

つぶしとして読んでたからよ。Ｆａｔｅ／ｚｅ○ｏとか、カ○ンとか、空の○界とか」

「あー、あんたが実は相当残念な神様だったことは理解した。だから黙っててくれ」

日本人がこんな駄神を崇めていた時期があったと思うと泣けてくるな……。

「で、人間。貴様はなにを望む。どんな異常能力が欲しい」

「いや、おれは別に――」

「なにもいらないって言ったら、わたしの権限で、あなたを狂化（バーサーク）させるわ」

「……」

「なによ、人間。わたしの提案に文句があるの？」

「いや、別に……。あんた、実はかなりの奈○信者だろ」

「そうかしら？　別にそんなことは無いと思うけど」

そんなことあるだろ。狂化と書いてバーサークって読ませてる人間なんて奈〇きのこしか知らんぞ、おれは。

「それがダメなら『十二の試練（ゴッド・ハンド）』とかはどう？　当分は死ななくてすむわよ」

「いや、別にＩＳの世界だったらとっとと死んで成仏したほうが気分的にラクだし。まぁ、自殺はしないが。と言うかあんた、ただバーサーカーのクラスが好きなだけだろ……」

「ええ、そうよ（ドヤッ」

う、うぜぇ……。

ドヤッうぜぇ……。

「と言うことであなたのチート能力は『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』に決定！」

「ちょっと待て！　なんでそんな攻撃的なチートなんだよ！　おれは別にＩＳに乗るつもりなんて――」

なんか勝手に話が進んでいることに不満を感じたおれが、アマテラスに異を唱えようとしたときだった。

最下位の回数が一番多くて、そのことにショックを受けてジャン卓に突っ伏していたブラフマーがグワッ！　と顔を上げた。

「えええぇえぇい！　五月蝿いわ！　つべこべ言わずにここから出て行け！　このキチ〇イジャン師がぁぁぁぁ！」

ジャン卓を叩き割らん勢いで拳を振り下ろした瞬間、おれの足元に穴が開く。

「えっ――ちょおおおぉぉぉぉぉぉっ！？」

まさか、アマテラスがＨＫだったなんて……（後書き）

感想とか誤字とか待ってるぜ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8215z/

神様たちと麻雀打ったらISの世界に転生ってどうよ……?

2011年12月26日01時51分発行